



元山間記 貳

13
2696
2



門へ 13
號 2696
卷 2

元正間記卷之四

目錄

一 安藤清安返り討之事

一 并関根彌治郎生推之事

一 小栗十藏英作上陸津之事

一 并小栗英作一家江戸上陸石之事



元正回信卷之四



并小栗十流... 并国野... 一...

元正回記卷之四

安後清安返討之事

并関根深治郎生推之夏

安後清安治左衛門之婿

安後清安と云送者之年来治左衛門

助力を清安に渡し治左衛門の命を

持系に清安を取立一生を送る事

しと云田子と妻子を残し金館林に

送途申りて関根を殺さし是治左衛

門書家の取少治左衛門の死骸の醉

たゞくを傳へ少くも念肯隨ひ徹し伯
父の歎ねら関根を討て治た為りも向
ふを遠に居しと思ひ立心をもつに大
共いおろ安彼亦尋るる書きて遠にあり
サマ金枚は独身より信家正し一を在る由
少定め翌年の六月中旬より安後清安
忌込を忌し白本綿をたんと秤老り
志め秋更り及んと関根の居を伺ふ
く元来治治昂し人々情をさる大酒
くく青の夜隣家へ招き進すから

碎夜中平者深しを人僅のちり只を人
之前後し去りに科居り清安えり治治
穴窺ふ新する名雷のくく歎の事おれを
を免し一を系をて討果に一者おれと
若く治治昂と汝洲と達し治治昂を
少及んくいふとの知り然に振いそりく
戸を引ぬ治治昂の横り討ててとる系
くく二尺を寸の帳拵扱をかり一麻首を
まいとをを通し黄いり関根を討と
目と免し一をかり二ととるい先死入る

斬り身と衣を脱ぎ一黄きく口をさくしんれと
首の骨と咽ふくの首を通しんれり未の運め
をさくし知と真力の白刃を握りエイと云く
後の方へともひやう首の骨ともひやう咽ふく
の皮斗からさくしんれをたのよに押し上る起
しんれ勢い清安ら後らゆふよを袈倒さ
法活席枕えの力をぬるちふく後打ち切
るる勢いきいしんれ一ち力し清安看百
を割き倒さうし掛ふ力し冥根うたれ
襟口を切舟し利法活席笠うたれ

めく打ちさくしんれ切殺しけ強敵隣
家の冥根後一盗人入りるとさくしんれ
灯を燈し殺十人押しんとさくしんれ
根子をとんれとたし仕合皆ちとらさくしんれ
よ五人組よとんれ路別 公儀一海田町の
外科を急ニテ取の府を逃くると膏藥
打ちし血の流らうれは寝てと命をさくしんれ
はと云冥根らけり志うしけ修りてをさ
らと眠る事とさくしんれ一連基盤引穿せ
とさくしんれ自らうし味線を弾浄る理

を神のり〜三日三夜寝入り〜其時の口野り
〜後使をとり〜其書を取ら〜平祥
委細を述流口上は〜其書に取法安
の死骸を見分〜其根の口書に合さ〜
関根去年熊五提〜安及治法を
報し書意の次序を引合難し〜治法を
の撰成〜勿論伯父の欲成と〜其寤首
を捨〜不業治治昂書意を治〜
〜引く〜ハ隣りある〜底〜平〜人
盗賊杯の仕業〜其根と男道一〜

治法を報〜其心之今首成
捨形〜法安を討〜其佛子前代
未軍と云〜唐の関羽と腕〜毒氣
を射ら〜其書〜辛院〜其の
根を彫〜其書〜其書〜其書
矢の根〜其書を自ら首の骨を捨〜たり
鎌倉の槍五郎景政〜其書の眼〜其書
を射ら〜其書〜其書〜其書
其に其根〜其書を〜其書〜
其の欲〜其書〜其書〜其書

系政より上越し一昔の礼せしむる泉三島
朝比奈義秀のいかに天下の取
代たしむるを返討のよし柄子に接しむる
を伴治の事上り隠したりし志つるに
伴治の命たの命告せの言申志つるに
病口より成今うてし絶命し及べしと
禮之儀名の伴治の命恨しる外に名
の外科を修りたる趣し少く療治の
方を知るべきやと尋ねし其医志を
も負しし御切口を能く洗ひし後しや

実根のや洗ひしは是なり一醫者のいふ
今息子の命を前より外科狼狽し
る但し素人醫者たるはかたし出
切口洗ひしは死血中と味し皮肉の留を
ちやゆると其後名を付し余危しか
し一今もし後し系を切捨其病口を能
く洗ひし療治なり一好む平念を
実根少く走しし易し事あり
いしし中存しし中療治中しと云然
るる志やししの上しと四五種執

湯のこゝろを後たる糸を知らせよ
をひきし首を抱ひ枕をいりし
ハ洗ひしとととと色者ら志や
乃不修る流しし疵よりよを
何しと関根ら意味よりと云は
せまも丹い疵を後中し音楽を
登しし藤治三つりよ及し疵平愈
し及んしり色生大首に他は
しし眼具ら事叶いんたの
し一せしと投出しし関根

深治昂く一せのりし通しなる男道
を才一丹兵け仕還しけし我の上
者といえし道をとけし事し
裕菜肉織の糸入し物忘れ侍の道
しかしと云ふ二君し仕つた
し折言し遠ねしお老に戸中を
にこそ申し志羽二を茶路の裏
着し志縮緬の糸肉織を
えを扱しとたのよを
出ししと色髪しと色赤
と眼の

猿眼とて其丈五尺八寸大少右のツ通りより
その川へかゝりて先供の尻に一突退る
事おろしにまゝそを能相子なり何時
ても死是怖とて江戸二人とておれ首
切法活弁んをとりと大少右のツ先供よし
道を除く通りより雨降より漸く
行道行りし御女中おれ通りより
これら道の要所へ足を踏込女中を通し
小見よりおれと抱く能道を通し
老人と見せしとておれと能道をかゝる

関根をらんちとて考の老り田舎侍とて
行当難くおれを言物をえに扱こゆ
よとて倒し或は杉平薩摩寺及
よ玉足懐き言繩に三人関根より
何より割へ道の要所へ突倒しおれと
喧嘩と承り玉風をれら薩摩寺良
力の鞘をち割き抜連切しおれを関根
の物の殺たせぬといふとておれと三人
おれ高峠の海へおれと某と関根は活弁
切薩摩寺及おれを友とておれ居居の浪人

ちうり多念ちうらハ何時もて心なまきとて
ても新頼唄も帰りたり薩摩ち後ハ是原
屋を帰まら必討首となり故其場ハ清
知ハ成よりり凡江戸中より也予ハ薩摩
野良をたのてり一ハ流治命ちり其
流考の者ハ昔の男達因前よりてあてさる
予ハ西平甚金杖三町の官子ハ関根も也
予ハちをさる事叶ハ何内の喧嘩狼藉ハ
能さハ関根をたて取のてり一調室ハ
成る事多し一も一生の間ハ種々の吐

第書ハ及いし一其申ハ人ハ務る事
ハ僅ちりも裏借家ハ居るも其ハ六也
予ハ羽合をりハ挿一ハ右の外行しては
五日六日曰ハ白米三升ハ一食ハ飯ハ
焚味暗をこもて生者のこもて一ハ
予ハ文入夫を喰も五六日ハ食事ハ
宇中ハ板急布巻をたてて其の傍りて
外客来りてハ板行焼を立ハ飯洲未
洲ハ妙をほハ我修者ハ其門人を
其ハ教ハ事ハをせハ其ハ其の是也

車不叶と川と夫人の前へ出る車
たゞの女犯を立男をを六の人の場町
本換町の昔居役者たゞ左刀抄を指すし
久し待てよ海大酒をれ右酒と碎と喧
をせぬ小田系より才子とと抄書彼のふ
行も夏よりし冬にもし其日ゆりよ
りもあつと男とと云ふし何れ一生江戸
よとと浪をちり男あり七十三歳を
長命ふし享保七年秋長死を親教
進もちり一年久しとちりたゞ大家め

三河を治を流と云者死骸を死仕舞
呉りり活治身居宅より羽令一水挿
きつが外より道具なりしと文箱一つ
在是年無欲流の可十二巻差科の刀
長谷部則長代金三十五枚昭若未仕後
三十五枚中阿活方打紙と志舞金
板の後夏の彫の目黄楸匠之誠と胃道
を立後より歌舞妓招言りし活治身
う車何代は梨

三河を治を流と云者死骸を死仕舞

小栗十藏 兄美作也一滝流

事

去程年高田路の義天下のワ沙流と
酒井輝樂氏後ハ裁許して忠臣萩田
之馬を始メリ御ケヨリ御自或ハ御
之馬を始メ小栗貞代ハ尾流居御自
家督大六掃部と名改むり御自
威勢を振い貞代一味同心の輩大和を
得候事事々々御自ハ御自貞代御自
の才は次男之序三男十蔵と云之序ハ

山出一公卿よりいふも能く人物も
十蔵と文武を磨き武士道を立切
者及兄貞代等々年来の逆意を推量
し御自ハ御言を御自ハ御自ハ御自
暗し御自ハ御自ハ御自ハ御自ハ御自
貞代利分と云威勢流階ハ年来の逆
意執心更ハ止事御自ハ御自ハ御自
堪へつ子妻子ヨリ今生の御自ハ御自
貞代ハ御自ハ御自ハ御自ハ御自ハ御自
者ハ御自ハ御自ハ御自ハ御自ハ御自

破くも五人の先祖に對し不孝の亦一天下
の眼力を肖く科天道の照映に非ず
欠らば罪を蒙り一家曲事より行かざる便
と思名大六より宜敷死をなすはつらぬ今
十幾つ詩を用いらるるや心を及めらるるは
小栗の家長久より一けしきや兼引所ら
天子むくのゆゑ折言云ゆは一左様を
けてる全クや世をなせしと目を見
看むら法を誦めりる英化で大年
怒り毎夜を果を道意者と悪口

神更の大老種樂の及や心を引出さるる語
同新の曲者先頃出入を用のより急度中
流せし如く理不るる踏込来り悪口を吐
き其世をおえ給へ左様をよす於て
計り捨んとすや色登てるはれと十藏
様は世をすめりしとら笑ひ忠孝
の道をなす詩を中々よすをれとす
又國家の志をばい先祖の名を稱はんと
なるとれとすや歌ハ中せや自らしとす
るやの上の死と必定はとす一下二節の

ふふとてうんざりし先年生息もいと成敗
生息才といへせ在名父の血縁もはや玉家
の考より身を顧みよむと成士のはぢやうり
り自分も是れ右刀と成家十花よりりりり
系よりあり是れ性仕より十花やうりりり
討つるうりりりりりりりりりりりりりり
産くと言ふもいりりりりりりりりりりり
と習小性多うりりりりりりりりりりり
り抱める上をとりりりりりりりりりりり
之座ありりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりり
り連名の中書、ふ来人達りりりりりりり
まゝ新のうりりりりりりりりりりりりり
在りりりりりりりりりりりりりりりり
の者其外、親類様又人達りりりりりりり
等、あつた江戸表へりりりりりりりりり
之馬ヤ、りりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりり
喧嘩、余はりりりりりりりりりりりりり

一 居よと 双方引分 江戸の事 支度 及 江戸の事

元正間記 卷之四終

元正間記 卷之五 目録

一 高田之諸士傳奏對交之事 并 送長等仕立之事

一 堀田筑前守大老之事 并 安宅丸之事

元正間記卷之五
高田之諸士傳奏對受之事
并送長中仕置之受
當將軍細吉公館林ノ座の内高田
騷動の年委細平之知石天下の政道
雅樂歌成之成方菫ノを好
入らるる今度思召有之
越後家中の者在再い召下
傳
奏平於之對受之傳
了ら遊者上之意
越後及

元正間記卷之五
高田之諸士傳奏對受之事
并送長中仕置之受
當將軍細吉公館林ノ座の内高田
騷動の年委細平之知石天下の政道
雅樂歌成之成方菫ノを好
入らるる今度思召有之
越後家中の者在再い召下
傳
奏平於之對受之傳
了ら遊者上之意
越後及

亦書を以て之を依て後伊達書に書し
少領の萩田主馬に石出之田の諸士各々
江戸に召し召の旨披露し及し時々大和
元年十二月廿六日傳奏し於て大評定
に作付其日申出座尾張大納言光友卿
紀伊中納言光貞卿水戸中納言光國卿
松平讃岐守松平下総守松平肥後守
井伊掃部頭松平左衛門守中
堀田筑前守松平藤田守後河津世俊守
大之保加賀守松平側用人牧野後守

美川守松平右衛門守松平相摸守
井上大和守松平寺社守秋元但馬守
本多伯耆守松平世濟守大目附横田
信中守松平佐十郎守甲斐守
志保守大目附表立守松平中書記
といふ由ありし事小栗貞元守目付
松平八景守永内守流石守萩田主馬守
目付守松平久左衛門守附録
少評定所石出守井伊掃部頭守上
高田守松平功の次守一守

連日同月廿九日大目附横田備中守十人目付
子、近夜西昂たらの使者、水田法右衛門使者
に、御身杉平大和守及定下小栗貞代と嫡子
大六をとり出し、御後越よ、貞代と祖父
権現様、目隠とゆゑ、越後家へ、御人
に、御身代へ、國家の政道を執行、身をお
まへ人を、標私欲を、重んじ、具上聊の由流
き、ゆゑ、悻大六を、三河守連枝とて、成
との企天下を、悟り、め、國家の隆衰を、起
此大逆心之、信と、切腹に、御身け者也

嫡子大六を、父貞代より、跡をと、是と、ん
ぬ、い、か、兆と、見、ぬ、是と、見、ゆ、り、於、て、父、目、氣
の、逆、心、也、兆と、見、ゆ、り、於、て、誅、せ、を、不、中、子
と、し、て、父、を、誅、せ、る、道、を、り、忠、孝、を、弁、へ
さ、る、科、道、秘、し、父、目、氣、り、切、腹、に、御、身
昔、被、申、渡、貞、作、を、誅、し、り、法、中、五、十、六、才
り、て、切、腹、に、大、六、才、之、父、我、く、賢、君、の、教、を
信、道、意、の、雲、結、り、と、せ、し、い、よ、り、よ、り、も
復、切、り、大、六、妻、後、り、三、才、の、男、子、り、り
杉、平、法、貞、守、及、り、御、身、之、小、栗、貞、代、と

石名放八丈崎の土崎に作舟者也云田
の塚清和之義、越中富山の城に松平
大藏左輔越後守長岡の城に牧也駿河守
同左新發田城に溝口信忠也右兵衛
依之、三田守仕置るお洲よりけ御存人
と酒井種樂以後先達とて尾能隠
居る御舟とて伊賀、意の程當り代始
り仕置り威勢隆きり家門越後守とて
少政易り御舟とて少政と道
松平様と末の伊名君誠々天下美水年

乃之堂と云移りとら御うぬ者、那志

堀田筑前守大老之事
其頃安宅丸とて

其頃老中上席下総国古河城主堀田
筑前守正後とやり、親父加賀守正盛
大猷院様取立の老中に、伊予守恩作
系り、お取立の御追懐切とて伊予の家故
打續くと、二代老中、御舟太の由緒を
以て、將軍家より、隔心なく、被思言
酒井種樂以後、大老、免の後筑前守

大老職を仰身是より流るる後威
啓蓋盛人より本内實より因役稲葉
丹後守山通の息女より松平陸奥守細村
中庵中の姉君より無より其流り例用人
牧野信後守成貞と申、牧地駿河守家別
よりより小深より前、將軍家此
甲例を流るる勅南甲代より成南、將軍の甲心
より叶く追日の甲加指より立身南時日此出乃
甲出流り信後守成甲一人と申、得るる南
將軍より甲義と

大猷院様甲三男より甲母公の元来甲湯後
女中により、京都出生の甲子殿、
將軍敏林より甲坐の甲うち甲母君の甲足甲居
の処、京都東山より居候より、茶花を流り
大根賣、右扇を流ると云、箱林より石を流る
本、左扇を流ると改め、石より下を流る
右扇を流り、甲子殿を流り、我身流民を流
事、世より流るるより、子より流るるを流
却仕らると必し、天四討を流るる一、家紋の
未代を用るる者也、我性、古民なる事、を

紋所より御一子孫の奈をも禁む一
本庄と改む一九の行貫と名付小
行貫三ッ宛三行と並て都合九ッ
此紋の大根を賣し一御有し一
御一の形成去年より一
大根二本お遠より一某東止り
一其を賣文友と一不持仕交し
其一其のいと一其指を賣文
平生居留し一を並て大者
一其を賣文友と一其指を賣文
一其を賣文友と一其指を賣文

家中より憐無縁一諸大名より
いんまん一様一御一之身
人無上下彼是沙汰すもの
斗一諸人より一其れを
將軍より一其れを
と中より一其れを
半刀の筆冑の横一其れを
宗質四位侍従より一其れを
嫡子本庄安流一其れを

甲斐守知淵と改め、誠り目是しき出世
時、又安永年奇代の三、身是しきと
柳沢出羽守保昭と止し、け人苗
杉軍家、籍林より座の布ら、甲廓に安
し、髪月代上、に、君の甲斐揚
を、仰旨領地二、正三十石、多り、甲廓、浦
四、石、甲門の外、半と、我を、と、と、不、成、し
く、今、並い、形、に、甲出、に、て、是、し、甲、代、の
成、り、と、追、し、甲加、増、柳、沢、を、甲、印、と
申、た、し、と、出、羽、守、と、改、め、上、迄、玉、依、費、の

城を揚り三年、と、過、す、三、万、六、千、石、百、三、十、石、四、石、
と、任、飛、鳥、し、所、の、勢、い、と、り、お、亦、松、平
右京大夫輝貞と、云、い、松、平、伊、豆、守、家、別、り、て
分、知、七、千、石、り、て、始、に、造、酒、之、と、申、て、甲、小、姓
を、お、勤、り、り、甚、甲、心、り、叶、い、是、亦、日、の、出、れ
甲、出、に、下、申、は、主、牛、の、概、と、し、は、仰、旨、を、
當、お、守、甲、一、世、の、旨、に、向、し、り、願、く、大、名、の
の、甲、を、是、し、り、言、録、甲、を、申、之、り、好、く、大、名、多、
し、然、り、と、堀、田、流、之、の、者、と、大、光、職、に、仰、旨、
と、り、と、り、と、甲、物、之、の、面、に、好、く、城、を、好、く

ら作付の筑前守と一應の居りて、
牧野柳次と威督を越え、お念の松と
沙汰せり。然るに前將軍嚴有院殿、
中大層のや生を別く、鷹野を好む。歩
行を所く、お成とて、就中隅田川、小松
川、教度のや鷹野、此の川、助通の
松護のあり、先年、お奉り向井お監
小濱、申給ふ。命とて、是、伊豆の玉三、給ふ
て、川、お坐、おを、此、依て、京、大阪
江戸、中、に、及、と、此、の、法、藏、人、大、工

彫物、作、金、具、銀、箔、漆、原、高、金、塗、漆、原、之、府
漆、原、の、名、人、を、撰、り、召、集、ら、せ、三、年、に
出来、せ、り、其、の、恥、者、三、拾、七、間、明、の、百、七、間
也、市、上、段、櫓、四、分、八、間、四、方、櫓、千、利、お、子、地、高
岸、繪、金、の、千、分、一、の、障、子、朱、塗、紋、沙、お
く、是、を、張、り、お、板、戸、狩、野、永、生、の、四、季、の、花、鳥
奈、利、お、中、匠、の、四、分、お、の、教、お、屋、在、お、風、呂
坊、お、厨、お、能、上、段、の、舞、臺、を、此、ら、れ、り、
た、の、お、お、供、の、お、お、料理、の、お、お、お、お、お、お、
澁、樓、櫓、を、上、り、時、の、鏡、を、搦、り、お、お、

龍江鶴首より就の尻一丈五尺鱗
其金重吹流り、厚鉄の毛をふせ志許令
おしはくりまたり舟端志榭午に梨子地
葵のワ紋金のさるり、志郎物七廣
ちりしをある挺を艦權を志府給たうり
大岡朝鮮の陣の砦石をさうり日本丸を
前代未算の如とさうり彼日本丸といふ
及ふりさの成の砦道に助光輝り大川筋
小奥お一丈しなり、迹去分海は、年
中舟を、道の上、約了、下と三役、追、奥、思

さうり、追、分、に、日、本、丸、に、浩、海、さ、い、日、光、御
宮、り、此、ワ、砦、安、宅、九、と、さ、う、り、小、舟、ワ、形、を、
は、さ、う、り、さ、う、り、頭、大、サ、七、寸、五、分、七、サ、二、丈、サ、
り、四、心、物、ハ、頭、ハ、近、年、を、ワ、砦、危、素、系、原、年、
拾、毎、を、今、より、其、道、は、り、け、と、さ、う、り、北、に、堀、田
筑、前、サ、度、 当、将、軍、の、ワ、代、ハ、成、り、サ、松、子
を、志、家、親、如、り、才、一、殺、生、を、ワ、娘、よ、り、ワ、代、
成、と、等、り、サ、ワ、鷹、を、さ、さ、り、れ、分、海、ワ、鷹
野、と、り、ふ、と、さ、う、り、希、ぬ、一、度、も、彼、安、宅、丸
小、石、さ、う、り、事、ハ、形、り、さ、う、り、

將軍家へ言上致す
嚴有院様ヲ好み
其の好む
中安宅丸此の如き益の令銀莫右天下
の費と申者
天下の甲冑を修る京都の大佛を造る
浅く仕出しけ未用よし
安宅丸を碎金浪珠玉を以て潤資
を遊可也
召いさむ
將軍は

の大船をれと免し
夫の流前も下
安宅丸を
其の安宅丸を
彼の安宅丸を
伊豆の
大船を

車しきりう那 堀田筑前も此趣也
ううと之を 將軍上意を兼たぬの事
恐るるを 推し 山妻孤狸の事
連自身も 再死し 死すべし 此
上意を以て 打止る者こと 不知して
殺ふ人の 大工若人 是を以て 是れ
ううと云ふ 安宅丸を 二や三打碎く
江戸中貴 賤男女 見物より 市を去り
河を流し 情をぬ 者も かくし けり
日教 二十りよ 及まして 兎角 初よ 入人

静息を 伊豆へ 送る ことあり
え未 伊豆の 之様 して 他へ 一人 留に
たと 我生 國之 ちや 南へ 用を
蓋し 恥し 天下の 寶具 同之 刑也
前 將軍の 心より 何れ 恥し 何れ 事
中 死す 際 天下の 政務 司る 堀田
筑前も 是れ 天下の 政務 司る 堀田
是れ 世上 何れ 築前も 送る 松
沙汰 堀前も 送る 松

東生をうし山條塚佐川世良田本中須
武田家新絶一甲判崩きの浪人或い
武田忠孝の城と長泰の家申も一江士
と成り居候も勿滞新田足利の一族お
氏間より下りて而此と成りけり而此西人
より他方と遠い武を磨き憐れ
けりし招接をともふ又農業を
しし後柄の大服を謝儀をたのい平日
けいよし節の事合鞠の合武藝れ友
味侍への出逢りや愛も事けりまら旨

名なき者多しふるさつに
多し由法を山一りるる恒成系
不持愛一義貞と氏の出書信玄の威
状重代の左の具足兜多し不持愛利
依地相本相生也を百姓の風多たの
くむををたを流前中成在國の官
彼の者たを召寄ら由法を礼一目足
中付意事を上ケ候り天下其水平成た
の事けりし一若し天下より大事
出来せり早未流前中一

後日ハ恩賞ヲ其身ノ一の偏ニ寄リ
ト申合メ甚小共ニ之ノ料理ホヲ修リ
帰ルルハ車誰ニト好ク世上ノ恩色
ヲ亦モ送人の格ノ少活トシテ諸人ヲ集
ラセテ車トシテ其地ノ去程ノ間
ト好ク系鞠トシテ相登ラセテ大老威勢
誰カ有テ並ハシテ志ヲ大南時日乃出
ノ出テ其地後チ柳沢出テ其の路トシテ
叶ハシテ其少活トシテ其地ノ在國の
御心士トシテ其地ノ尾ノ尾ノ尾

付テハ其地ノ故ノ筑前チ後ハ因役相集
丹後チ皮師知年トシテ丹後チ後ハ合身七人
ノ姉二人古前員流チ皮の子供之七人の法
舎亦いつまシテ其地ノ役年お勅ラシ
縁者ノ年級筑前チ後トシテ其地ノ其地
の処申シテ福系系トシテ其地ノ其地
ハ小住組トシテ其地ノ其地トシテ其地
古天傳一袋量トシテ其地ノ其地トシテ
貞享元年八月十四日毎日通リ法役
人等登帳トシテ其地ノ其地トシテ其地

お守家を恨ましく逆人の思ひ立を
諸浪人石集め大老職の威勢をいそ内々
諸大名を誇らうとねと風説を誑く天下
の忠臣稲葉を見ちまふるにりり一え斗縁者
の事ぬ筑前ち道心の程能知りて是れ大將
の事とてさうと天下のワ大車よ及ぶらう事
爲るに極らうと内筑前ちを三巻報しそ此
を人乱んと成し一命を捨るに於て是
を事と天下に流る事と覚悟をまいたる
たう通斗とさう其とて是れ其れとて

殿中より於て筑前ちを切敷しそ何て家内
絶く作付たうと斗介より何のワ内は其を
筑前ち跡式とお凌たう嫡子下総ち山仲
とてをりし係立上雑説あり又とや不守ぬ
意味をさぬ是近の神田橋を友とて上
本國橋法もあはく石鋪と下を空に
のあうと下総ちとて屋鋪とらうし
声利其上古河の城をさ名上ぬ洲山
の城とて作付らう是不首尾とて示し
筑前ち知害の事いさう逆意ぬ内法

伯耆守山永の代より八千石より四万石
より伯耆守先中没らばお勅しりて元祖
依後守山信守右臣政也子孫の事を思
召しりて名義を令しりて事

亦法組神祇組之事

兼町奴男並流石之夏
前將軍様ノ御仁大度の御君故
郡治世の中萬事ヲ攝りて事
一統の仕並に諸大小石より事

遠慮ちりて吉原通い事
品川海ノ船遊い換を泊細を
目黒より山辺ノ少寺持を東叡山
幕よりちまりて夏冬兩國の大
如く屋敷を並に取にりて大
を上げ隅田木挽町新舞妓
見物木戸とを引りて江戶始りて
事之聲を振藉北をの者
宥め遠流より作付遠山
其時代の者を年追生

能く歩み利かざる程者中代成り其の中急
怒を不顧中心旗本のいとも男達と云者
出々上下万民の物大と成法人とてやく
とより其大将を水野十郎左衛門と中五子不
を領し中藩代随一水野監物水野
隼人正右十郎左衛門近き親類とて自ら
中代役を了る程作中とて村供者な小普
請入を就き合々碁と云ふ成りさるる不
下付二十兩の小普請令を出一中代を
お勤しとて面々十郎左衛門古中代合組

成勤仕をお止め實活六法日本大小乃
神祇組いり方々所持の男達と披露し
四人の家老を細金時貞光末武用人
を保昌を一人武者と名付合碁中代官を
とてそのいりり自分の友とて明者取送
樂みききりり其仲間と云ふ加賀
甲斐中代部三十郎之丞をおとて夏を
おとておとて仲官出合より極是の成
戸を障子とて屏風を引込し大
火持よりあつり容し小袖の産えたり純

いゝ煮くつゝくゝと人と喰いそと返りあふ
水とくちろ戸障子一面より押戻り客に惟子
くくあふまふまふい此走よい冷麦冷や
免人杯出り料理款立い七龍の汁養の
鯨氣の洗智蛇の蒲焼い此の塩辛
杯の熱を食いしり子柄とくも松菜岩
の友之叔中江戸中ををいそんし酒年
辟くく大道よ二味も天下の叔早く辻高段
と下り書院組小世組にくお朝も小派
のえりくく白旗挑灯と棒さむ持たは

世らくくく是は下く悪口も持振元とく矣
名をもめく利彼早く元住還く二味居
行者そと咎むまは我く棒さむ中を喰
金矣こととく小強く咎むく此は喧嘩
く切散に免く用言麻子に構ハぬ情こと
皆人住還を戻り通しり其は悪口
叔交り通しり行者そ加突ん甲地友り泥坊
く又と板敷の二十ヶ松とく大井外
水井十郎左んくく下神祇組と中
何十人しと山の子組清子組芝組

と別をあれども是斗を以ては
斗と町よし男(幸)と云ふは其親方
分と云ふは情随院の長之清之屋大権之清と
之古人有江戸出まに長之清と清草
情随院境内より居り信々情随院を
其名を長之清の下谷令状より居す
前年其辺へ行り御旗本大道寺権内と
之人の屋敷前を通り音子何れ屋敷
此は長之清より行りけた古の心か
処を踊上り二足の犬を踏倒し鼻

情を挿んと七八百枚出と振返り心付
所を踏倒し二足の犬を踏倒し鼻
歌唄より返り幸利是方して唐犬の
其名を取額を板上げ風流なる男
其頃年若の者在長之清の額を乞ひ
唐犬額と末代をの名を乞ひ女房
吉原江戸町上総屋の抱く玉桂と云
名代の遊女たりし長之清の申す炭火
を挿んと女を指を切せし挿り女房之
情を清長を清く事し種々面白き事

行は先定平略其外名代の者共よら
放駒四郎之清劫之姫治年薩摩藩を仰
真云小八大併之姫小併小年、杖田治若
依此治郎左の扱之え未夫より家職の左
者大たれ先通より者將奕打と成り男幸
を後世よとことけ者大の語中神祇組と
鏡押しとや、いさ此と喧嘩仕知し其に
江戸中りて何事し者大れ天下の事も
大勢より何事し論議しぬく我
行るし年月を送りける

巖有院様中他界遊ハるまき當り代
中政道、山友をうりては、中先代
のしとくは、くす、不覺也

元正間記卷之六終

